

土木の魅力探求「話す」「聞く」「考える」

『町並み』から始まるまちづくり

本企画では、学生委員がチームを組み、それぞれの興味を持っていることを探究する。本企画は3部構成になっており、「話す」では、担当が興味を持った理由や取材前の気持ちを率直に述べる。「聞く」では、取材を通して、疑問に思ったことを当事者に伺う。「考える」では、取材で学んだことを踏まえ、感じたことや思いをチームで共有する。今回は学校で学ぶ中ではなかなか見えてこないまちづくりの最前線に着目して深堀りする。

話す Discussion

中野—— 僕は自身は大学で都市計画や

まちづくりを学ぶ学生として日々フィールドワークや研究活動が続けていますが、実際に取り組まれている活動の最前線の現場で起こっていることまで迫ることは難しいなと感じています。そこで、実際に住民の共通の財産としての町並みを保全して、まちづくり活動を継続している

若狭鯖街道熊川宿の現場の人々の声を聴いてみたいと思いました。皆さんは、どこに着眼して、話を聞きたいですか。

上田—— 自分も修士研究がこの話題と似ていることがあって、とても興味があります。住民主体で何か町の活性化に関わったり、移住者が町の中で地域おこしをしたり、という活動は、実際にどのような人々が、どのようなモチベーションで携わっているかが重要です。そこで、熊川宿の

ような歴史的な町並みが資源となっている場所では、地域住民がどのような思いを持っているのか、について聞いてみたいです。

松原—— 私は実際に熊川で暮

らしている人の視点が気になります。まちづくりの観点も大事かもしれないけれど、中山間地域に立地する熊川宿のような集落にはどのような公共サービスが提供されているのかなどを知りたいです。人口が都市部へ流出すると、空き家・空き地が増えたり、さまざまなサービスの統廃合が進んだり寂しい話題が多い中で、生活している人は、何を大事にして町の活性化につなげているのか、という点で深堀りができたらなと思います。



写真1 取材の様子（宮本哲男氏（中央）、時岡壮太氏（最左））

中野—— 確かに、集落の持続性はよく議論される問題だし、将来の姿やビジョンを描きながら、今後の取り組みを考えていくことも重要そうですね。

松原—— 同じ地域に住んでいる人と言っても、町並みや歴史の価値を誰が同じように感じているわけではないと思いますし、価値観は人それぞれかもしれないですね。

中野—— 今回は、昔からのまちづくり特別委員会と、近年になって町に参入した法人の両方にお聞きできる

聞く Interview

ので、まちづくりの担い手に関する話題も聞きたいですね。

〔取材協力者〕

宮本 哲男氏

若狭熊川宿まちづくり特別委員会 会長

時岡 壮太氏

(株)デキタ 代表取締役

福井県若狭町に位置する鯖街道熊川宿。かつては街道の宿場町として栄え、今もなお江戸時代の風情が色濃く残る町並みは国の重要伝統的建造物保存地区に選定されている。この歴史ある町で、地域の文化を守りつつ、新たな可能性を切り開こうとする二人に、これまでの熊川宿の歩みと今後の展望について伺った。

——自己紹介をお願いします。

宮本——若狭熊川宿まちづくり特別委員会では会長を務めております。地元に住民として、町が衰退していくのを目の当たりにしながら「何かしなければ」という思いで関わるようになりしました。伝統的建造物群の保存やイベントの企画を通じて、地域

の活性化に取り組んでいます。

時岡——(株)デキタの代表取締役を務めております。現在は、熊川宿の空き家を活用した宿泊事業を運営したり、地域資源を生かした事業に取り組んだりしています。

若狭熊川宿の発見と町並み保全までの動き

——まず、熊川宿のまちづくり活動のこれまでの歴史について聞かせてください。

宮本——熊川は、江戸時代から京都と若狭を結ぶ物流の拠点として繁栄し、宿場町としてもにぎわいました。しかし、1922(大正11)年に国鉄小浜線が開通すると物流の主役が鉄道に移り、熊川宿の役割は次第に薄れていきました。その後、高度成長期には若い人たちが都会に流出し、高齢化が進んでしまいました。——そのような状況から熊川宿の価値は、どのように注目されていったのでしょうか。

宮本——1975(昭和50)年頃、熊川宿を横断する河内川の上流にダム建設の話題が上がったとき、福井大学の先生が調査のため、この地域を

訪れました。そこで、宿場町の古い町並みが注目され、本格的な町並み保存対策調査が開始されました。当時、住民は半信半疑で、自分たちの住んでいる町に大した価値があるとは思っていなかったそうです。しかし、熊川小学校の子どもたちも調査に参加して、一生懸命に町並みの価値を模索していく中で、今後空き家が増えていく懸念もあったことから、徐々に住民が町並みの修景に向けて動き出していったそうです。

町並みの保全からまちづくり活動へ

——現在のまちづくり特別委員会として活動するまでには、どのような動きがあったのでしょうか。

宮本——熊川のまちづくり活動は、1981(昭和56)年の町並み調査を契機に「熊川宿町並みを守る会」が誕生し、1995(平成7)年に現在の「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」になりました。要は、町並みの保存からまちづくりへと流れが変わったということです。「古いものを残さなアカン」と言うばかりではなく、伝統的な町並みを生かして、美しく、

かつ、住みやすいまちづくりを進めていくことを目的とし、同時に会の名称も変えました。

また、当時の会長さんが、文化財を建物ごとではなく町全体で保存する方針を打ち出し、住民たちの理解が得られるよう働きかけ、1996(平成8)年には国の重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)に選定されました。この頃から本格的に町並みの修景や景観整備が取り組まれるようになっていきました。

——活動を進める上で、特に苦労したことや難しかったことは何ですか？

宮本——町並みを守るというのは、単に古い建物を保存するだけではなく、そこに暮らす人々の生活とどう両立させるか、という問題が常につきまといます。専門家や行政などとともに住民の声を聴き、集落全体で町並み保存への意識を高めていく中で、特別委員会はまちづくりの充実を図る組織に発展していきました。住民全員が委員会の会員となり、具体的には、空き家対策部会、活性化部会、広報部会、町並み対策部会と事務局から構成され、分野ごとに部

会が活動しています。

——町並みを保存するだけでなく、住民主導のイベントも実施されていると聞きました。

宮本——重伝建に選定されたことを契機に、地域活性化のイベント支援として「熊川いっぷく時代村」というイベントを年に1回、秋に開催するようにしました。これは住民が中心となり企画から運営まで、みんなで協力して創意工夫して盛り上げています。このようなイベントも、これまで守ってきた美しい景観があつてのもので、知らず知らずのうちに住民同士のコミュニケーションが深まって、防災や美化活動への協力意識が高まることにもつながっています。

しかし、イベントなどのボランティアを中心とした活動で、できることには限界があります。そこで、新たなまちづくりへのチャレンジとして、収益を出して持続的な活動へつなげていくために、時岡君たちが取り組んでいるところです。

外部資本に頼らない地域資源を活用した取り組み

——時岡さんはどのような経緯で熊川に関わるようになったのですか。

時岡——実は僕は熊川の出身ではなく、若狭地方の別の町の生まれなのですが、東京の大学で建築を学び、30代で若狭に戻って腰を据えてまちづくりに関わるようになりました。

当社は、古民家などの遊休不動産を活用した施設開発や農産品を活用したプロダクトなど、地域の文化を体験できるサービスを提供しています。具体的に熊川では、古民家を改修したシェアオフィス&スペースや宿泊施設の運営を行っています。僕たちが目指すのは、家族経営の小規模事業ではなく、多様な分野で事業を展開する、30名規模の優良中小企業として成長することです。地域の雇用を生み出し、持続可能なまちづくりを実現するための基盤を作ることが、当社の役割だと考えています。

——古民家を改修したりノベーション事業について詳しく教えてください。

時岡——熊川は現状、全部で140軒中、3分の1の約40軒が空き家です。最初に取り掛かった「菱屋」というシェアオフィスは、当主の方がい

なくなってから10年余り使われていなかった建物を改修して、できた建物です。古い建物でとても大きく、いくつかの部屋に分けてオフィスにしています。

「八百熊川」という宿泊施設は、複数の空き家を一棟一棟宿泊できる建物にリノベーションした建物で、建物の基礎部分から湿気対策や断熱改修を施し、快適に過ごせるような空間にしています。

——熊川での取り組みでこだわりとしていることはありますか。

時岡——僕らはこの熊川に本社を置かせてもらっている法人であり、地域の人がちよつとでも関われる宿にしたいという想いがあります。古民家宿の事業は全国的にも増えてきています。外部の資本に開発を頼むやり方が商売的には確かにやりやすいですが、そうではないやり方として、極力地域にお金を落として、雇用の創出にもつながるようなやり方を模索しています。

その一環として、昔から活動されている「おもてなしの会」の皆さんに依頼し、実際に宿泊されている方の部屋に地域の食材を使った料理を



写真2 町並み修景のbefore after (昭和期 (左)、現在 (右))

ふるまうというプランを提供しています。最近では、新しく開設した食品加工場が、熊川の方から当社スタッフへ料理の知恵を伝承する場にもなっています。他にも、若狭地方の伝統野菜や郷土料理をウリにした自社商品を製造し、東京のセレクトショップで販売したり、ECを利用した販路を開拓したりといった取り組みにも発展しています。

——今後増えてくる外国人観光客への対応はありますか。

時間——多い月だと全体の30%が海外の観光客だったこともあるほど、増えてきています。これからは、地方の宿泊業は30〜40%は海外からの観光客を相手にしていかないと続けられないと思っています。最初はマニアックな層が訪れていたのですが、最近は海外の旅行会社と連携して、京都・熊川・金沢の3泊4日の行程を旅行パックにして販売するプランを検討するなど、団体客を想定した取り組みにも挑戦しています。

山の資源を活用したこれらの山村集落の在り方

——熊川でのこれからの取り組みについて教えてください。

時間——熊川は宿場のすぐ裏が山になります。今後はこの山の資源を活用したいと思っています。若狭町とまちづくり特別委員会など地域の方々が、熊川城跡地まで熊川トレイルを整備されました。その上で熊川トレイルの終着地となる場所に公民連携事業で「山座熊川」という大規模なアウトドア施設をつくりまし

た。今後は企業の研修や団体での利用を呼び込んで、お金を稼げる仕組みを作り、宿場に還元する持続的な山村集落を目指しているところですね。

達成には、自治体や事業者地域の関係者など、複数の主体が協働して一つの事業を進めていくという団体競技のような姿勢が必要になってきます。今は、ボランティアで関わってくれている人たちが支えている部分が大きいです。そこに宿泊業から食品製造まで何でもやるという企業が入り、地域に雇用を求めて移住者が増えることがこれからの伝建地区のまちづくりでは大切なのかと考えています。

——少しずつでも空き家が減って、町が活気づいていけたらよいですね。

時間——そうですね。実際、ここ数年で14件の空き家に利活用の動きがありました。僕たちが関わっているのは5件だけで、他は個人で改修した物件でした。これは、熊川の50年近く続けてきた町並み保全活動あつてのことだと思います。また歴史的な街区でもこういった商売が許され

るのは、元来の宿場町としての性格があつてこそだと思います。

宮本——熊川宿は、歴史ある町並みと地域の温かい人々が共存する場所です。宿泊や食事、アウトドア体験などを通じて、ぜひこの町の魅力を感じてみてください。

(2025年1月12日(日) 熊川宿場町内の宮本氏宅にて)

(聞き手…中野・上田・松原)

考える Analysis

中野——取材を通して印象に残ったことはありますか。

上田——自分が印象に残っているのは、住民が組織的にまちづくりに関わっているという点です。取材前は自治体や行政が主導していると思像していたのですが、実際は町並み保全も住民が主導して、積極的に関与するようになったことは驚きでした。

松原——私は、熊川宿の景観資源の保全にとどまらず、地域住民の雇用を生んだり、地域資源を活用したサービス提供を取り組まれたりしている点が興味深かったです。特に小



写真3 古民家宿「八百熊川」の部屋

学生などの子どもたちとも関わりを広げている点は、これからのまちづくりにつながっていると感じました。

中野——確かに、町の新陳代謝が機能するような取り組みは、熊川のポテンシャルを引き出しているように感じました。時間さんが新たなチャレンジを続けられるのも、これまでの住民の努力があつてのことでしたし、「熊川いっぽく時代村」も住民が町並みの歴史的な価値を分かち合っていたからこそだと感じました。今後は熊川宿を参考に、元気な山村集落が広がることを期待したいですね。

(学生編集委員…中野太雄、上田晴斗、松原帆乃香)